

第八章 隠れ家の謎

1

明石海峡大橋は、ギドラの予想したとおり通行止めになった。それも萌黄たちが橋にさしかかった直後に。

「ヒョーッ、運が良かったな」

揣摩はガッツポーズを作ってみせたが、萌黄は手放しでは喜べなかった。ニュースを聞いたからだ。

今朝からどのテレビ局やラジオ局も放送を見合わせていた。ネットニュースにもほとんど報道らしい報道は見られなかった。

ところがつい先ほど、NHKがテレビ放送を再開した。運転する柳瀬を除く全員が車内テレビにかじりついた。

ニュースは地震についても触れていた。震源は兵庫県南部で、各地の高速道路や瀬戸内海にかかる連絡橋などが点検のため、通行止めになったという。

萌黄が気になったのは次の点だ。各道路の通行の可否を決めるためのネットワークが一時的に混乱したという。そして、それが元どおりになったのは、つい今しがただとテレビポーターは告げていた。

あまりにもでき過ぎている。

果たして、ギドラがやったことじゃないのか？ 自分たちの乗った車が橋を渡るまで、通行止めの決定を遅らせるために。

何にせよ、五人の乗った車は明石海峡大橋を渡り終え、無事、淡路島に上陸した。

ちなみに車は二台目のエステイマだ。

橋に乗り入れる際、ETCの車輛監視カメラや検知器などは避けるわけにいかない。もし最初の車で逃げたことが敵側に知れていた場合、ここに記録を残すことで、発見される恐れがある。

柳瀬はエステイマ一号（と彼は呼んだ）を三宮で返すと、別のレンタカー会社で新たなエステイマ（二号と彼は呼んだ）を借りてきた。今度のは色違いだが、同じ八人乗りだった。

エステイマ二号は、神戸淡路鳴門自動車道を快走し続けた。ここまで来れば先を急ぐのが得策だ。洲本インターを降りると、山に囲まれた洲本市内はすぐだった。

小さな繁華街を抜け、海岸通に出る。そのまま大浜公園に乗り入れ、海水浴場の手前で柳瀬は車を止めた。

陽射しは強いが、空気はなんとなく秋の気配を含んでいた。五人は車を降り、それぞれに背伸びをしたり、深呼吸をしたりした。

「エリー、お前の島はどこにあるんだ？」

揣摩の問いかけに、伊里江は海に向かってやや左寄りに指を突き出した。

「ふーん、見えないな」

「……ごくごく小さな島ですから」

「懐かしいか？」

伊里江は目を細めて、砂浜に打ち寄せる波を見た。

「……ええ」

「ふだんは馴染みの漁師さんに乗せてってもらうんだっ
たな」

「……そうです。ここから少し北にいったところに住ん
でいます。……でも、私は彼らを巻き込みたくない」

伊里江は口調に断固たる思いをにじませて言った。敵
が追ってきた場合を想定しているのだ。

「ロボットみたいなお前にも、恩義を感じる心はあるら
しいな。まあいい、どこかで船を調達してこよう。幸い、
柳瀬が船舶免許を持ってるし」

萌黄もむんも目を丸くして柳瀬を見た。

「便利な奴でしょ？」

柳瀬は笑顔でピースサインを返した。

市内から海岸沿いに二キロほど走ったところに、サン
トピアマリーナというヨットハーバーがあった。夕暮れ

が近づく頃、五人は柳瀬の借りてきた小型クルーザーに乗り込み、ヨットハーバーを後にした。

萌黄が船に乗るのは生まれて初めてだった。ディーゼルエンジンの音は小気味よく、潮風が肌に心地よい。これが遊びで来たんだったら、非常に心躍る体験だったろうに。

クルーザーの行く手にごつごつとした島が近づいてきた。予想以上に小さい。小学校の敷地ぐらいの大きさだ。「……あれです。東側にまわってください」

伊里江の指示に柳瀬は器用に船を操る。やがて島影にちよつとした入江が出現した。クルーザーはゆつくりとその中に入っていく。

デッキに座っていた萌黄は寒さにブルツと震えた。岩山をくり抜いたような断崖に囲まれた入江。そこには太陽も差さず、暗く湿った空気が重く漂っていた。

エンジンが止まった途端、辺りが急に静かになった。

かすかに季節外れのセミの声が聞こえる。

「……到着です」

五人は途中で買ってきた厚手の靴に履き替えた。Yシャツにネクタイの柳瀬は上着を羽織り、萌黄たちはTシャツの上に長袖シャツを着た。

「……ついてきてください。岩陰に昇れる道があります」

萌黄たちは伊里江を先頭に、狭い山道を登っていった。木々や土のむせ返るようなにおいが鼻をくすぐり、萌黄は何度もくしゃみした。

昇りきったところで平坦な道に出ると、五人は我先に石の上に腰をおろし、息を整えた。

「……ここから歩いて五分ほどです。暗くなってきましたから、急ぎましょう」

五人は腰を上げ、再び獣道けものみちのような細い道を歩き始めた。そしてほぼ正確に五分後、伊里江の家が彼らの前に現れた。

2

目の前に現れたのは、今にも倒れそうなプレハブ家屋だった。何十年も放置されたような朽ち果てかたで、とても人の住居には見えなかった。伊里江兄弟は本当にここに住んでいたのだろうか？

周囲には木々が何重にも繁茂している。おかげで家のまわりはかなり暗いが、海上からの目隠しになっているようだ。

揣摩が正面のドアに近づこうとするのを、伊里江が腕をつかんで止めた。

「……セキュリティを解除しますので」

伊里江はおもむろに太い木の一本に近づくと、手の平を幹にあて、指にぐいと力を入れた。すると幹の一部がスライドし、ボタンらしきものが現れた。伊里江はボタンの上のくぼみに人差し指をあてた。ボタンは反応し、光が灯った。と同時にブルンと小さな音がして、空中に電気が走ったような感触があった。

萌黄たちの眼前に驚くべき光景が展開した。倒壊寸前の家屋が波立ったのだ。

（立体映像や！）

萌黄が看破したとおり、それはホログラフィック立体映像で作られた家屋だったのだ。栗立つような波が干渉を起こし、やがて消えてしまうと、その下からは何の変哲もない、人の住めそうなプレハブ家屋が出現した。

「……私たちの手で住めるように改修したのですが、万が一、誰かが来たり、空から見られた時の用心にこうしてあるのです。さらに、知らずに近づくと感電する仕掛けがしてあります」

伊里江は幹のボタンを元通りにした。そして実物のドアに近づき、再び指をドアノブに押しつけた。指紋認証システムなのだ。ドアが開いた。

「どうして？」萌黄が声を上げた。「こっちの世界に来た時、指紋は逆さまになってしもたんとちゃうの？」

「……そうです。だから私はここを出るとき、現在の指

紋データに更新しておきました」

なるほど。萌黄は納得した。でも――

「あなたはさつき船から降りる時も、何か気にしてはつたね」

萌黄が指摘すると、伊里江は口許を少し曲げて、

「……見られてましたか。じつはあの船着き場にも山道にも簡易なセキュリティシステムが施してあって、そのチェックをしていたのです。おかげで、私の留守中、この島を訪れた者はいないことが判りました」

船着き場からここまでの間に、いったいいくつトラップを仕掛けていたのだろう？　もし知らずにこの島を訪問する人間がいたら……。萌黄はぞっとした。

「……日が暮れます。さあ入りましょう」

伊里江に続いて、萌黄、むん、揣摩、柳瀬がドアをくぐった。ドアが閉められ、伊里江が壁際のスイッチを押すと、暗い玄関に内灯が灯った。

伊里江は靴を脱いで上がった。四人もそれにならう。まめに掃除が行き届いているようで、床の上に埃は見えなかった。

四人はすぐ前の部屋に招じ入れられた。

「殺風景な部屋だな。家具がひとつもないぞ」

部屋を見回した揣摩は率直な意見を口にした。六畳の部屋にはただ床と雨戸の閉じられた窓があるだけである。

「部屋はいくつあるの？」むんが訊ねた。

「……四つです。この島は昔、洲本の御大尽、つまり裕福な漁師の網元の所有物だったそうです。この家は、昭和三十年代にその子孫が別荘のつもりで建てたものらしいのですが、長年忘れられた存在でした」

「すると、あなたたちがお世話になった漁師さんというのは」

「……その息子さん夫婦です。私たち兄弟が逃亡中にお世話になった、数少ない篤志家のかたがたです」

『篤志家』の使い方が違うような気がしたが、言いたいことは萌黄にも伝わった。

伊里江兄弟は何ヶ月も人目を避けて逃げ続けた。そんな中で出会った人の情は、砂漠のオアシスのように彼らの心を潤したに違いない。しかし——しかしそんな人々の住むこの世界を、伊里江の兄は破滅に導こうとしている。そうまでしてこの世界に復讐したいのだろうか？

「……こちらへどうぞ」

伊里江はさらにみんなを部屋の奥に案内した。

そこは短い廊下になっていて、他の三つの部屋に通じている。伊里江が連れて行ったのは台所だった。

「……四つの部屋はあくまでダミーです」

「ダミーって、どういうこと？」

伊里江はそれに答えず、台所の隅に行くと腰を屈めた。

そこには床収納のフタがあつた。彼が把手をぐいと引くとフタが開き、大工道具などを入れた収納カゴが見えた。さらに伊里江はそれを丸ごと横にスライドさせた。するとそこに、ぽっかりと暗い穴が現れたではないか！

「地下室があるんですか——」

柳瀬が感動したようにつぶやいた。

「……私の後に」

伊里江はスツと暗い穴に姿を消した。四人は遅れじと穴に近寄った。

「階段だ」

揣摩の言うとおり、四角い穴の浅い底から斜め下の方
向に階段が伸びていた。両側にオレンジ色の明かりが
点々とついている。まるでトンネルのようだ。

四人は順々に穴の中へ降りていった。

3

地下はひんやりとした空気に満ちていた。階段の終点
は縦に長い廊下につながっており、天井には薄暗い蛍光
灯が点々と灯っている。

「……こちらへどうぞ」

一番奥で伊里江が呼んでいた。廊下には右側だけにド
アが三つある。半開きだったので萌黄たちはそれとなく

覗き込みながら進んだ。一番手前の部屋にはベッドや衣装ケースが置いてあった。寝室だろう。

二番目の部屋は食堂で、冷蔵庫や食卓テーブル、電子レンジなどが六畳ほどの部屋に押し込められている。狭く感じるのは、床の上にインスタント食品を詰めた段ボール箱が並んでいるからだ。

伊里江は三番目の部屋の前で根気づよく待っていた。

「この部屋か？」

揣摩が横柄に訊ねると、伊里江はこくりと頷いて部屋に入った。揣摩たちも続いて足を踏み入れる。

そこはまさに研究室と呼ぶにふさわしかった。

十二畳ほどの広さの中、壁際にはところ狭しとコンピュータが並んでいる。部屋の中央には大きなテーブルが並んでいて、図面やプログラムのプリントアウトとといったものが置かれている、

テーブルの向こうには、アングルを切断する機械や工具類が、これもまたきちんと整頓されて置かれている。

この家の住人の性格を反映しているのだろう。

萌黄は以前から自分の研究室が持てたらなあ、と夢に描いていた。それに近い光景がここにはあった。自分にもっと自信があったら、大学の工学部に進むこともできたらうに――。

部屋の奥は、左右の壁に届くほど幅の広いカーテンで

仕切られていた。伊里江が開けると、そこには見たことのない物体が鎮座しており、萌黄たちは息を飲んだ。

巨大な地球ゴマ、というのが第一印象だった。

外側は直径五、六メートルのリングが何層にも重なっているが、中は支えるものもなく空洞になっている。

「これでしょ？ エリーさんが向こうの世界から来る時に使った機械は」萌黄は訊ねた。

「……そうです。元の宇宙と鏡像宇宙をつなぐ転送装置。兄は自分の書いたマニュアルの中で“ブリッジ”と呼んでいました」

ふたつの世界の架け橋。^{ブリッジ}

まるで前世紀のSF映画に登場するようなやぼったいデザインだが、この機械の向こうに、懐かしく住み慣れた世界があるのか！

横に並んだむんも同じことを考えていたらしい。

「この機械を使ったら、あなたや萌黄は元いた場所へ帰れるんでしょう？」

「……はい」

伊里江はあっさりと肯定した。萌黄は興奮のまなざしで次の言葉を待った。

「……もちろんできますが、この機械は莫大な電力を消費するので、次から次へと送り出すというわけにはいきません。一回動作させるのに最低三日は充電時間が必要

となります」

「三日も――」

「……ちょうど私が出かける前に充電を始めていたので、明日の朝には完了します」

「明日だって。萌黄」

むんがよかったねという顔で振り向いたが、萌黄には返す言葉がなかった。伊里江が横から補足する。

「……もちろん萌黄さんが戻りたければ、使ってもらってもかまいません」

ますます萌黄は言葉に困り、うつむいたままテーブルの上の分厚い本に手を伸ばした。表紙には『転送装置』という鏡文字が書かれていた。

トゥルルルル。

突然、テーブル中央の電話が鳴った。萌黄もむんも、揣摩や柳瀬も飛び上がるほど驚いた。伊里江はつかつかと歩み寄ると、無造作に受話器を持ち上げた。まるで予期していたようなそぶりだった。

「……ああ、いいよ」

それだけ言うかと受話器を戻した。

「誰からだ？」

揣摩が不安と疑惑の入り混じった目で訊ねた。伊里江はそれには直接答えず、全員の顔を眺め渡すと、

「……みなさんにご紹介したい人がいます。そのままお

待ちください」

伊里江の言葉が終わらないうちに、階段を下りてくる足音が聞こえてきた。四人は思わず身構えた。無人と思いい込んでいたこの島に、他にも誰かいたのか？

足音は廊下をこちらへと迫ってくる。萌黄は全身に鳥肌が立つのを抑えられなかった。

4

「まさか、お前の兄貴じゃないだろうな！」

揣摩の詰問口調に、伊里江はわずかに首を傾げたただけだった。

ゆつくりとこちらに近づく足音。揣摩はそれを伊里江の行方不明中の兄だと言うのだ。

「このオタク野郎、人をおちよくりやがって！」

揣摩は口汚く叫ぶと、背中に隠していた拳銃を取り出し、筒先を伊里江に向けた。

「揣摩さん！」

「タロちゃん！」

皆は驚きの声を上げた。しかし揣摩はまったく意に介さず、

「俺はずっとコイツの話は怪しいとにらんでたんだ。リアルだとかヴァーチャルだとか、わけのわからん単語を

並べやがって。すべてはお前らイカサマ兄弟がでっちあげた空想話なんだろうが！」

萌黄が昼間、聞かされた話だ。疑惑に疑惑を重ねて、揣摩はとうとう限界を超えてしまったのか。

当の伊里江は、銃口を向けられても表情ひとつ変えず、そばにある回転椅子にスーッと腰を落とした。

「……揣摩さん。ずっと私を疑っていたのですね。まあ無理もないでしょう。信用してもらうには、直接証拠が少な過ぎますし」

「ゼロなんだよ！ 証拠なんて」

吐き捨てた揣摩の顔がだんだん白くなってきた。引き金にかけた指がブルブルと震えている。

テーブルの上で両手を合わせた伊里江は、ため息をひとつつくと、身体を揣摩に向け、深々と頭を下げた。

「……すみません。私の説明に至らぬ点があったようです。でも彼に会えば、少しは信用してもらえるかもしれません」

「彼だど？」

「……紹介します」そして入口を向くと、「……入ってもいいよ」

ドアが開き、ひとりの男がゆっくりと戸口に姿を現した。それを見たむんたちは、自分の目に映ったものが信じられなかった。

部屋に入ってきたのは、もうひとりの伊里江だった。
つまり、ふたり目の伊里江が登場したのだ。

誰も声が出せなかった。揣摩は銃を持つ腕がだらんと下がったことにも気づかず、瓜ふたつの伊里江たちを交互に見つめていた。

「――ヴァーチャルさんでしょ？」

最初に正体を見破ったのは、萌黄だった。

『……あなたが、モエタンですね？』

ふたり目の伊里江は、喜びにあふれたまなざしを彼女に向けた。

十分後、いくぶん落ち着きを取り戻した四人は、あらためて伊里江の紹介を受けた。

「……彼が、この世界にいた、私のヴァーチャルです」

『……初めまして。リアルがお世話になってます』

ふたりの伊里江は、四人の正面に並んで座った。リアル伊里江は白のTシャツ、ヴァーチャル伊里江は紺のTシャツを着ている。

「はーっ、見れば見るほどそっくりねえ」

柳瀬が感嘆の声を漏らすと、

「隅から隅まで、鏡に映したみたいに左右反対やね。髪
の分け目からホクロの位置まで」

と、むんも感想を述べる。

「……この傷跡を見比べてください」

リアル伊里江が左腕を差し出した。二の腕の裏側に古い傷跡があった。

『……私のは、これです』

ヴァーチャル伊里江が両方の袖をめくり上げて、自分の二の腕を示す。ヴァーチャルの傷跡は右腕にあった。まさしく鏡で映したような位置に、裏返した形で。

「……鏡像宇宙が誕生した時、私はまだ向こうにいました。その後、自力で——あの転送装置でこちらの世界にやってきたのです」

「だから、ふたりいるんやね」

むんは感慨深げに言った。

ヴァーチャル伊里江はおもむろに口を開くと、遠い目をして話し出した。

『……鏡像宇宙の誕生時間が過ぎた後、私は自分がどちら側の人間なのか、すぐに検査機で確認しました。さすがにヴァーチャルであることを知った時はショックでしたが、そのままじっと待っていました。すると計画どおり、リアル私が転送装置でやってきました。そして彼はすぐに“リアル狩り”に出かけたという次第です』

「どうしてこの世界に不慣れなリアルさんのほうが、島を出ることにしたの？」

『……あなたはむんさん、でしたか？ その質問は当然

ですね。理由はいたって簡単です。この世界の私は身体が弱いからです』

そうなのだ。同じに見えて、彼は怪我をすると即お終いなのだ。

『……それに、このコンピュータは、彼には扱いづらいですしね』

（逆さまのキーボードはムチャクチャつらい）

「おい」

それまで黙っていた揣摩が、ヴァーチャル伊里江に話しかけた。

『……何でしょう？ 揣摩さん』

揣摩は手近にあった紙とペンを揃えて、机の上に差し出した。

「俺の言葉を言ったとおりに書いてみる。お前もだ、リアルさん」

ふたりの伊里江は言われるままにペンを取り上げた。

「行くぞ。――江戸末期の激動の時代を生きた私は、文明開化の世を見ることなく、この世を去った」

揣摩は二度繰り返した。

（昨年演じた大河ドラマの役柄や）

萌黄にはすぐ判った。

ふたりの伊里江はそれぞれ異なる利き腕でさらさらとペンを走らせた。できあがった文章は、一枚の紙の左右

に、まるで反転コピーかと思えるほど、きっちり左右対称に書かれていた。

「……信じてもらえましたか？ リアルとヴァーチャルであること」

彼らには十分意図が伝わっていたようだ。

「とりあえず、な」

揣摩は横を向いて、ふんと鼻を鳴らした。

5

むんがひとまずお茶にしようと言案した。

船に乗る前に買ってきたインスタントコーヒーを取り出し、湯は伊里江が提供した。テーブルの隅を片付けると、六人はそれぞれ回転椅子を引き寄せて座った。

「ビールも買ってくればよかったな」

揣摩はひとりごちた。伊里江兄弟はどちらも下戸なのでアルコール類は一切置いてないという。

「揣摩さん、疲れてるみたいやね」

むんが心配そうにささやいた。萌黄も同感だった。銃は仕舞ったものの、さっきの興奮がまだ冷めないのか、落ち着きのなさが気にかかる。柳瀬が「横にならせてもらったら」と勧めても耳を貸さなかった。この即席チームのリーダーであるとの自負が、それを許さないのだ。

リアル伊里江はヴァーチャル伊里江に、島を出てからの経緯を話した。ヴァーチャル伊里江はふんふんと頷きながら聞いている。質問を挟まないのは、リアル伊里江の説明が過不足ないからだろう。さすがクローンだと萌黄は感心した。

『……今宵はここに泊まってください。もちろんいつまでいても構いません』

ヴァーチャル伊里江は両手を広げ、あらためて歓迎の意を表した。

むんと萌黄、柳瀬は頭を下げたが、揣摩は無視するように喉を鳴らし、

「洲本をキーワードにここまで必死にやってきたけど、問題はこれからだよな。どうするべきか」

誰も答えることができなかった。洲本にたどり着けば何かが起こる。そんな予感があったものの、結果は伊里江がひとり増えただけ。

「ねえ、リアルってあと何人いるんやったつけ？」

むんが問を投げると、萌黄がそれを受け、

「全部で十二人やったよね、エリーさん」

伊里江は、そうですと返事した。

「そのうちのひとり、ハモリさんは既に亡くなってるから、残るは十一人か」

言いながら顔を上げると、萌黄と揣摩の目が合った。

「そう、その中のひとりが俺の友達だ」

「ホンマに？」ごほつとむせたむんは床にコーヒーをこぼした。「ごめんなさい——その人はどこにいるの？」

揣摩は、あっそうかという顔をして、

「舞風さんには教えてなかったな。彼女は長野県在住のミュージシャンなんだ。アルパ奏者で、名前は影松清香という——」

「え——っ！」

今度の驚きはむんと萌黄の合唱だった。ふたりは自分の頬に手を当て、互いに顔を見交わした。

「影松さんって、今年の春、3Dライブに出演した人やんか！」

「背が高くて、すっごくキュートな女性でしょ？」

3Dライブとは、この春、テレビで試験的に行われた立体映像の放送番組のことで、影松清香はライブショーのトリをつとめた。むんも萌黄も彼女の大ファンで、携帯のデジタルプレーヤーにもアルバムを何枚分か保存している。

「影松さん、自分のことリアルやて、揣摩さんに告白しはったん？」

「いや。彼女はただ、鏡の国みたいと表現していたよ」

「鏡の——」

萌黄は我知らず、ヴァーチャル伊里江へと視線を動か

した。むんも揣摩も柳瀬もつられるように伊里江を見た。ダブル伊里江の間には、本当に鏡が置かれているようだ。誰もがそう思った。

「影松さんは、その後どうしてはるの？」

「判らない。電話が通じないんだ」

「そうなん……。心配やね」

萌黄は合点が行った。揣摩の気を重くしている理由はそこにもあったのだ。

「彼女を含めて、萌黄さん、ハモリさんで三人。他に九人がこの空の下のどこかにいるのか」

「そのリアル全員を政府の特殊部隊が狙ってる。彼らを亡きものにすれば、爆発は未然に防げるんやから」

「ひどい話だ。本人たちには何の罪もないのにな」

揣摩の燃えるような目がダブル伊里江に注がれる。すると意外なことにリアル伊里江が頭を下げた。

「……兄がみなさんに多大なご迷惑をおかけしたこと、心からお詫び致します」

その謝罪の言葉には感情がこもっていた。彼の両手の爪が太ももに食い込んでいた。

伊里江は決してロボットではない。長年の逃亡生活が、彼の感情を心の奥底に押し込めていただけなのだ。こうして出会ったばかりの人たちといっしょに行動しているうちに、何かが彼の心の琴線に触れたのだろう。現に隣

でブーツと相方を見つめるヴァーチャル伊里江が滑稽に
さえ映る。

怒りの矛先を体よくかわされた揣摩は「ちくしょう」
とひと言怒鳴ると、憤激を抱えたまま、テーブルの上に
突っ伏した。

空気を変えようと、むんが明るい声を出した。

「なあ、こうしたらどない？ わたしらが先にリアルを
全員見つけ出して、ここから元の世界に送り返すんよ。
名案ちゃう？」

むんの発案に、萌黄も一瞬、顔を輝かせたが、

「……無理です。くり返しますが、一度の運転に三日の
充電が必要なのですよ。残りの日数では三、四人が限度
です」

「もつと作れないの？ あの装置を」

「……無理です。わたしにはそんな技術はありません」

「機械なんていらん！」萌黄は思いあまつたように叫ん
だ。「そんなことせんでもええ。リアルを集めたら、説
得して、みんなで死んだらええねん！」

6

「アホなこと、言わんといて」

むんは眉間にしわを作って萌黄を叱った。

「そやかて……」

「あのね」むんはなだめるように優しい声で萌黄の言葉を遮った。「しょうもない心配せんでええの。わたしらにまかせときなさい。きつといい方法を見つけるから」
「……そうです！」

突然、リアル伊里江は力こぶを作ると、椅子を蹴って立ち上がった。

「……兄を捕まえるんです。彼もこちらの世界に来ているのでから、兄の元にもう一台、転送装置がある勘定になります。となると――」

「倍の七、八人は送り返せるのか」

揣摩が腕組みしてうなった。

「残りは三人やね。それで被害はどのくらい小さくなるの？」

「……それでもアジア一帯が吹っ飛びます。二人なら日本とその近隣にまでせばまり、一人なら北海道程度の広さで済みます。あらかじめ居場所が特定できれば、避難を呼びかけて、被害を最小限度に食い止めることも可能でしょう」

むんとリアル伊里江の口から、調子のいい言葉がぽんぽんと飛び出す。萌黄はあつけにとられて、彼らのやりとりを耳を傾けていた。

口で言うほど簡単でないことは、みんな百も承知だ。

お気楽になるには昨日今日とあまりにつらいものを見過ぎた。それでも希望がなければ前に進めないではないか。わたしたちは前に進むしかない。進むしか。

柳瀬はいつの間にか、部屋の隅で壁にもたれて眠り込んでいた。一日中運転させられたのだ。無理もない。

むんは立ったまま、ふうと息を吐いた。腰に手をやって一同の顔を眺めた。

「どのお顔もまぶたがくつつきそうやね。ひとまず結論が出たから、明日に備えて寝ましようか？」

揣摩がすかさず賛成と手を上げた。

「もう俺、起きてられないよ。なあ、エリー。どこか適当な部屋を貸してくれ」

「……地上の家屋の奥の部屋を使ってください。布団があります」

「あんがと」

揣摩は「また明日な」と言い残し、柳瀬を引きずるようにして研究室を出て行った。

「わたしたちには、どこを貸してもらえるの？」

むんが訊ねると、

「……階段下の、私たちの寝室を使ってください。私たちはここにいますので。シャワーが必要ななら、キッチンの奥にあります」

「ありがとう」

そして萌黄を促すと、あくびをしながら研究室を出た。寝室にはベッドが二つ、壁に沿うようにL字型に置かれていた。ふたりは交替でシャワーを使うと、さっぱりとした身体でベッドに横たわった。

「むん」 萌黄が呼びかけた。「さつきはありがとうね」
「うん」

「わたし、むんがおらんかったら、どうにかなってたと思う」

「お互い様よ。今日はわたしもどうにかなりそうやったからね」

「……………」

「結論も強引にまとめたけど、安眠にはちょうど良かったと思うわ。フフ」

むんは携帯を取り出してPAIを呼び出した。二匹のリスは花火のように元気よく空中に飛び出した。

《むんちゃん、おネムなんだね》

もんが宙返りをしながら言うのと、

《ちゃんとご挨拶なさいよ》

と、みんなが横で飛び跳ねている。

「ふたりとも、相手ができなくてごめんね」

《うん、ちよつと残念だけど、忙しそうだもんね》

《ゆっくりおねんねしてね》

「ありがとう。みんなももんもおやすみ」

《おやすみー》

《おやすみねー》

萌黄も携帯を取り出して、画面を覗いてみた。

(ひょーっ)

画面の中に和室があつた。敷き詰められた畳がはるか彼方まで続いており、だだっ広い空間の中央で、二匹のPAIが向かい合つて座っていた。もちろんモジとギドラだ。二匹の間には、将棋台が据えてある。モジは盤面をにらみながら何度も「くそ」と唱えている。ギドラは視線を上げ、萌黄にピースサインを送ってみせた。

(ホンマに仲良うやつてるやん)

萌黄は安心して携帯を閉じた。

「おやすみ、萌黄い」

むんの声は、もう半分夢うつつだ。

「おやすみ、むん」

耳に痛みを感じて、萌黄は目を覚ました。頭上の空調ダクトがひゆるるると音をたて、どこか遠くで換気扇の回転する音が聞こえた。

ひそひそと伝わってくるのは話し声だろうか。誰が誰に話しているのだろう。携帯の時計は午前四時を少しまわったところだ。床についてから六時間。

萌黄は耳をすました。話し声がだんだんクリアになっ

てくる。声の調子から伊里江がしゃべっているが判った。ダブル伊里江でプチ会議中なんだろうか。

〈……兄さん、やめてください〉

萌黄はガバツと飛び起きた。

7

〈……私は承服しかねます〉

伊里江の硬質な声が続いている。時折、噛んだりつかえたりする様子から、感情が激しく揺れ動いていることが読み取れる。

萌黄はベッドを下りると、むんの枕元に駆け寄り、身体を揺すぶった。

「起きて、むん」

「——ううん、どないしたん？」

「シート。……聴いて」

萌黄は再び耳をそばだてた。

〈……なぜ、ここまでする必要があったのですか？〉

「ほら」

萌黄はむんの腕を叩いた。ところがむんは眠りから覚めきれないのか、

「何にも聞こえへんよお」

とにべもない。萌黄はたまらず、

「わたし、見てくるわ」

と部屋を出ようとしたが、Tシャツ一枚の姿であることに気づき、あわててベッドの脇にたたんでおいたジーンズに足を通した。

「待ってよお。わたしも行くわ」

むんもよろよろと布団から這い出した。疲れがとれてないらしく、動きが緩慢だ。

「先に行くね」

萌黄はドアを開けて、廊下に飛び出した。

地下なので窓はなく、夜が明けているのかどうかも判らない。薄暗い蛍光灯に照らされたドアはどれも閉じられていた。萌黄は研究室のドアに近づくと、もう一度、聞き耳を立ててみた。しかし伊里江らしい声はするものの、もごもごとして内容までは聴き取れない。萌黄は思い切ってドアノブを回した。

ダブル伊里江は研究室の奥にいた。受話器を手にしているのはリアルで、ヴァーチャルはそばで相方の様子を心配げに見守っている。萌黄がゆっくり近づいて行くと、ふたりはようやく彼女に気づいた。

『……どうしました？』

紺のTシャツのヴァーチャル伊里江が声をかけた。

「ごめんなさい。話してる声が聞こえたので。……相手はお兄さんでしょ？」

それを聞いたダブル伊里江は、ぎよつと目を剥いた。

「どうかした？」

『……いえ』

ヴァーチャル伊里江はリアル伊里江の顔色をうかがった。リアル伊里江は目顔で頷くと、

「……兄さん。今ここに私以外のリアルがいます。電話をスピーカーに変えますよ」

リアル伊里江は受話器のボタンを押した。同時にヴァーチャル伊里江が壁際の机に置いてある、アンプらしき筐体のスイッチを入れた。するとブチツという音と共に、電話の主がスピーカーからしゃべりかけてきた。

〈その女性というのは、光嶋萌黄さんかい？〉

いきなり聞き慣れない声に名前を呼ばれ、萌黄は緊張のあまり、その場に立ちすくんだ。

〈こんばんは光嶋さん。初めましてとご挨拶すべきかな。真佐夫がお世話になったそうで、どうもありがとう〉

伊里江真佐吉の声は弟とは違い、朗々とした通りの良い声だった。萌黄は何と返事していいのか判らず、後ろを振り向いた。ちょうどむんがドアから入ってくるとこ

ろだった。萌黄はホツとした。

「早朝から起こしてしまったようで済まないね、光嶋さん」

重ねての呼びかけに、答えないわけにはいかなかった。「あ、どうも。こんばんは」

萌黄はテンポのズレた自分の返答に自己嫌悪を感じた。むんがそばにくると抱きつくように腕を彼女の腕に巻きつけた。

「あつはつは。なかなか素朴そうなお嬢さんだ。どうか真佐夫とは仲良くしてやってほしい」

「……そんなことより兄さん、話の続きです」

リアル伊里江は、明らかにいらだっていた。今の彼は自分たちというときの彼ではない。萌黄はそう思った。

「へさつき言ったとおりだよ。この計画を中止することはできない」

兄・真佐吉の声は揺るぎない自信と断固たる決意に満ちていた。実際の彼はきつと恰幅のいい、貫禄のある男

性に違いない。萌黄の中で膨らむ真佐吉像は、話し相手を射すくめるような眼光を放っていた。

「……それならやめなくてもいい。せめて規模を縮小してください。この国を吹き飛ばすなら、ひとりかふたりのリアルがいれば事足りるでしょう。それで十分なはずです」

スピーカーから深いため息が漏れた。

「私の気持ちに十分などないのだよ。それにお前はふたつの思い違いをしている。ひとつは『私の仇』ではなく、『我々の仇』だ。そして――」

「……わたしは滅ぼしてしまえ、などと思っていませ
ん」

「それはお前の認識が甘いのだよ。いっしょに大学を逃げ出した時点で、お前も私と同じレベルで指名手配になっ
ているのだ」

「……そんな――」

「まあ聞け。ふたつには、敵は我が国だけではないという
ことだ。世界中の国が、私の研究を喉から手が出るほ

ど欲している。奴らが手段を選ばないのはお前も身にし
みているだろう？ 連中はお前を捕えて、私に研究を渡
すよう要求するつもりなのだ。判るだろう？ 奴らには
倫理も正義も存在しない。いや、禁断の果実を手に入れ
た私たちこそ悪だと思い込んでいるのだ。世界に吹聴し
ているのだ。誰もそれに異を唱えない。そんな愚民たち
の棲む星など滅びてしまえばいいのだ。

お前はなぜあれほど多人数のリアルを必要としたのか
理解に苦しむと言ったな。確かにたかだか地球ひとつを
破壊するだけなら四、五人もいれば十分だ。しかしな、
それでは爆発が起こるまでの期間が短すぎる。連中には
もっと苦しい目に遭わなければならない。それだけの業
を背負っている。それに下手をするとリアルが全員、捕
獲され、奴らに始末されないと限らないからな。だか
ら増やしたのだ。連中が見つけ出すのが早いか、爆発が
早いか、これはゲームだ。二週間のあいだ、絶望にさい
なまれ、おのれの罪を悔い、せいぜいドタバタ喜劇を演
じればいいのだ。ハッハッハッハッハ

8

「狂ってる」

萌黄のつぶやきは、電話向こうの真佐吉の耳に届いた

らしい。

へうれしいね、光嶋さん。最高の賛辞と受け止めさせてもらうよ」

さらに含み笑いが続く。

萌黄は気分が悪くなった。とてつもない悪意を感じた。あまりに偏狭で独善的だ。

萌黄が腹を押さえて前屈みになったので、むんはしゃがんで「どうしたの？」と氣遣った。

「大丈夫」

と虚勢を張ったものの、萌黄の胃袋はひっくり返りそうだった。

むんは萌黄の背中をさすりながら、伊里江に対して、「あなたはこっそりお兄さんと連絡をとってたん？」と詰問した。うつむいていたリアル伊里江は澁面を上げると、心外だという表情で、

「……まさか。兄のほうから突然かかってきたんです。これまでいくら連絡をとろうとしても、応答しなかったのに」

そう言うと、ヴァーチャル伊里江に同意を求めた。

『……本当です』

ふたりの言葉にウソはなさそうだった。むんはすつく

と立ち上がると、凜とした姿勢で宙をにらんだ。

「初めまして、マッドサイエンティストさん。舞風むんと申します。あなたのせいで大切な友を失い、逃亡を余儀なくされ、今こうして親友の萌黄といっしょにあなたの弟さんのアジトにかくまってもらっています。」

わたしはあなたに聞きたい。最後の大爆発が起これば、あなたも死ぬんですよ。それでもいいんですか？」

へほう、これはまた威勢の良いお嬢さんの登場だね。お姿を拝見できないのが残念だ。

舞風さん、君のように利発的な女性にまで迷惑をかけたことを心からお詫びしよう。私はね、君たちのように優秀で前途有望な若者たちを失うことに、心から大きな痛みを感じている。そう、私の行いは神をも恐れぬ所業だ。私はその責任を痛切に感じている。だからなのだ。私こそ死んでお詫びせねばならない。でもな、私の行いそのものは間違っているとは思っていない。

私は発見かつ発明したのは、人類が手に余るエネルギーであり、その制御装置だ。けれどもこんなものは作るべきではなかった。当初、私はそう思い、毎日後悔に暮れたものだ。

だが長い逃亡生活が、私の近視眼的な俗物根性を払拭してくれた。そして気づいた。これは神が人類に与えた

試練だ。人口ブラックホールは試金石なのだとな。神は人類に究極のエネルギーを持たせることで試そうとした。これからも繁栄を謳歌する資格があるのかどうかをな。その執行人に選ばれたのが私だったのだ。

私は北海道を地上から消してみせ、彼らに最終決断を迫った。だが彼らは右往左往するばかりで、解答を出すことはおろか、意見をまとめることもできなかった。まあ予想はしていたがね。

人類は自らの愚行の末に、滅びの道を選んだ。そして私は最期のお膳立てをするべく、こちらの世界にやってきた。私は最初から自分だけが生き残って助かるうなどとは、露ほども考えとらんよ

むんは言葉に詰まったまま、両の拳をぐっと握りしめた。

狂気の理論には何を言っても無駄だ。真佐吉はすでに、世界を道連れに地獄へ堕ちることを覚悟しているのだ。

それでも言わずにいられなかった。

「あなたに神の代理人なんて資格はあらへんわ。自分の肉親まで犠牲にするなんて！」

へああ、その点だけは最も痛いところだ。

弟がこちらに來たことは想定外だった。だから私はこ

うして電話をかけたのだよ。転送装置を使って元の世界に戻るよう、真佐夫を説得するためにな」

むんと萌黄は驚きと疑いの目をダブル伊里江に向けた。リアル伊里江は顔を曇らせながら、無言で頷いた。

「爆発の高エネルギーは、リアルを源とするブラックホールによって生成されることは弟から聞いたね。このエネルギーが大爆発によって放出される際、リアルはたとえようもないほどの苦痛を受けることになる。私は弟をそんな目に遭わせたくない。」

舞風さん、光嶋さん、君たちからも頼んでくれないか。真佐夫に元の世界に帰るようにと」

むんも萌黄もあきれ顔でスピーカーを見つめた。何という身勝手な男だろう。この人にはいろんなものが欠けている。

リアル伊里江は、さらに驚くことを告げた。

「……揣摩さんが受け取った二セ総理の映像メールがありましたね。あれを送りつけたのは、兄だそうですね」
犯人は意外なところにいたのだった。

へ真佐夫がいきなり光嶋さんを探して島を飛び出したので、私はあわてたよ。よりによって鏡像の世界に不慣れなリアルのほうが飛び出すとは、まったく無茶をしたものだ。だから私はどうにかお前を研究所に引き戻す方策はないものかと散々頭を悩ませたんだ。その時、資料の中に、光嶋さんは揣摩太郎とかいうアイドルのファンだとの情報を発見した。都合の良いことに、現在彼は関西にいてという。だからダメ元で揣摩太郎君を誘導する偽りのメールを送ったわけさ」

ダブル伊里江が揃って身を乗り出した。

「……待ってください。萌黄さんの資料をどこから入手したのですか？」

萌黄も気になった。柳瀬はファンクラブから漏れることはないと言っていたが。

へお前だよ真佐夫。お前のパソコンだ。

私は島を抜け出す直前、コンピュータのサーバを洗いざらいバックアップして、そのまま持ち出した。その中にお前と光嶋さんのチャットのログが残っていたんだ。

彼女の発言が残っていたよ、熱烈なファンだと。真佐夫、覚えてないのか？」

ふたりの伊里江はお揃いの苦笑を浮かべ、同じタイミングで机をドンと叩いた。そして互いに相手の出した音に驚いた。

萌黄自身は覚えていなかった。何度か書いたことはあったが、それがいつのことだったか記憶していない。ともかく伊里江が乗ってこない話題だったので、彼女も格別、意識はしていなかったのだ。

へ真佐夫の構築した研究所のコンピュータシステムは、外に対しては鉄壁だが、内には脆弱このうえない。まあ兄弟だから警戒などしてなかったのだろうがね。

情報を得てからは、なかなか楽しい作業だった。揣摩太郎君のアドレスは簡単に見つかったが、送信元に総理のアドレスを偽装するのは少々骨が折れたな。総理のCGは、かつて彼がテレビCMに出演した時に作られた3Dデータを、制作スタジオのサーバからこっそり拝借した。完成映像にはちよつとしたいたずらを施したのだが、光嶋さんはそれを見事に見破ってくださった

クツ！ 萌黄は唇を噛んだ。まるで真佐吉の手の平で踊らされていたようなもんやんか！ 真佐吉はやはり、世間の荒波にもまれ、何度も危地を脱してきただけのこ

とはある。自分たちのような若者が束になっても勝てる相手ではない……。

へそれでも真佐夫が島に戻らない時のために、他にも予備の計画を立ててあったんだが、無駄になったなへ

リアル伊里江がテーブルをガタツと鳴らした。ヴァーチャル伊里江が眉を上げて相方を見つめる。

「……どうして、どうして私のとった行動を知っているのですか？ まるでずっと監視でもしていたように」

へうむ……。このあたりでタネをバラさないと不公平かもしれないな。

じつは島を出るとき、お前の愛機に細工させてもらったのだ。盗聴器をひとつへ

リアル伊里江は椅子を蹴ると、転がるように壁際のアングル棚に駆け寄った。彼がつかみ上げたのは、ずっと肌身離さず持っていたボロボロのリュックである。初めて見た時は着替えの下着やTシャツで多少膨らんでいたが、いまばペシャンコである。いったい何が出てくるのか？

リアル伊里江は手に持ったリュックを元のテーブルに

持つてくると、スーッとファスナーを開いた。

「えっ？」「そんな……」

萌黄とむんは呆氣にとられた。これが非常時でなければ「やられた！」と叫んで笑い出したかもしれない。

思った通り中身は空だった。リアル伊里江はリュックのファスナーを全開にし、中に手を突っ込むと勢いよくリュックを裏返した。すると、まぎれもないデイスプレイとキーボードがそこに現れた。

リュックの裏面がパソコンになっていたのだ。

フレキシブルパソコンは最近ようやく普及の兆しが見え始めたが、まさか伊里江の愛機がそうだったとは。

〈見つかったか？〉

真佐吉はどこかとぼけた調子で、萌黄たちにとって緊迫したこの時間をも楽しんでいるように聞こえた。

リアル伊里江は無言でリュックのポケットをまさぐっている。ヴァーチャル伊里江は、そばで落ちた埃を綿密に調べたりしている。

「……これか」

リアル伊里江は筆立てに立て掛けていたピンセットをつかむと、ポケットの奥深くに貼り付けてあったものをつまみ上げた。

一ミリ四方の黒いシール。それが盗聴器だった。

10

リアル伊里江は頭を抱えてうなだれた。ピンセットから落ちた盗聴器は、ヴァーチャル伊里江が手に持ったボールペンの先で潰された。

「ひどすぎる――」

萌黄は小声でつぶやいたが、マイクの感度が良いのだろう、真佐吉が反応した。

へそうだな。肉親を盗聴するなど、ほめられたことではない。だがしかたがなかったのだ。『より多くのすぐれた情報を手にした者だけが生き残る』。これは高度に情報化された現代社会の不文律であり、我々はその世界で生きている限り、生き残るため、勝ち残るためには手段を選んでもない。私は弟の身を心の底から案じている。だからこそ心を鬼にして盗聴器を仕掛けた

「ウソや。弟さんのピンチに、あなたは何もでけへんかったくせに！」

むんが声を限りに怒鳴った。

〈まあ、君たちには私の思いなど、到底理解できないだろう。真佐夫が判ってくればそれでいいのだ〉

（なんちゅー自己中心的で思い込みの激しい人やろ）

萌黄は怒りに奥歯を噛みしめた。目の前にいたら、思いつきり罵ってやるのに。しかし相手が何を聞いてもどこ吹く風では、どんな効果も期待できないだろう。

ならば――。

萌黄はむんの横に並び立った。

「伊里江さんのお兄さん」

〈光嶋さんだね。何か？〉

「あくまでゲームと言い張るおつもりでしたら、わたしたちの分が悪すぎませんか？」

むんは驚いて萌黄の顔を見た。

〈ふむ〉

「わたしたちが生き延びるために、もう少しヒントをくださってもいいんじゃないでしょうか」

〈なるほど。もつともな申し出だ。君たちの側にも有益

な情報を流せと言うのだね。いいだろう。どんな情報がお望みなかな？」

「あなたのアジトの場所です」

「ほう——知ってどうするね？」

萌黄はぐくりとつばを飲み込んだ。

「あなたは……爆発力を最大限に高めるため、舞い降りたりアルをすべて一カ所に集めるおつもりだと聞いています。いずれわたしもそこに呼ばれることになるのでしょう。でも、あらかじめ教えていただかないことには不公平です。ゴールを知らないでゲームはできません。ぜひともお願いします」

萌黄は震える膝が折れないように必死で堪えた。こめかみや脇の下、背中には無数の汗が滴り落ちている。自分ばかりと大それたことをしているに違いない、そんな気持ちでいっぱいだった。

汗が目に入る。それを手の甲で拭うと、呼吸することも忘れて、じっと相手の出方を待った。

「——いいだろう」

真佐吉が重々しい口調で告げた。萌黄は全身の力が抜け、倒れるようにむんに寄りかかった。

「光嶋さん。君の勇氣に免じて教えてあげよう。ただし、その島を無事に脱出できればの話だがな」

その時、不吉なブザー音が研究室に鳴り響いた。すると今まで眠っていたすべてのパソコン端末が起動し、モニターというモニターの火が灯った。

「どうしたの、いったい？」

むんの問いかけに答えず、リアル伊里江は一台の端末にかじり付いた。モニターには地図のようなものが映っており、無数の赤い点が動いている。

「……見てください」

リアル伊里江が画面のボタンをクリックすると、テールブルの上に島の立体映像が浮かび上がった。それは建物を含む地形を精巧に模していて、海面下の様子まで広い範囲でカバーしていた。

映像は半透明になっているため、周囲でうごめく赤い発光点が異様に目立っていた。まるで水槽の中の金魚を覗いているようである。発光点はどれも島を目指して泳いでいた。

「……敵です」

そのひと言は、萌黄の心臓を恐怖で凍らせた。

11

赤い発光点は島を取り囲むように散開し、徐々に半径をせばめつつあった。点の数はおよそ十。

「本当に敵なん？」

むんが息せき切って訊ねると、ヴァーチャル伊里江が別の端末を操作した。すると島の映像の上に、カメラがとらえたと思われる別ウィンドウが開き、水上スクーターが波をけたてて向かってくる様子が映し出された。操縦しているのは、あのいまわしい迷彩服だ。

萌黄は身体から力が抜けていくのを感じた。

（どこまで逃げてでも追いかけてくるやん。安心できる場所なんてあらへん）

その時、廊下を派手な足音が近づいてきた。

「おい、この音は何だよ、うるさくって眠れないだろ」

「揣摩さん！」

「どうしたの舞風さん。その立体映像は？ この島？ ウワツ、蛭みたいに動いてるのは——」

「敵がまたあらわれてん」

「ううっ、勘弁してくれよー」

揣摩はそう言う、ダブル伊里江がベッド代わりに使用していた長椅子に倒れ込んだ。

「……へりも接近しています」

立体映像に、緑色に輝く点がふたつ加わった。そのうちのひとつが島の上空を縦断し、研究所の上を通過した。さすがにナマ音までは伝わってこないが。

「くっそー、どこで足がついたんだろう？」

揣摩の嘆く声に、むんはハツとなった。

「まさか」強ばった顔を天井に向ける。「まさか、あなたじゃないでしょうね？ お兄さん」

へははははは。さあてどうかな。そんなことより早く逃げたほうがいいぞ

「誰だ？」

揣摩が周囲を見回したが、みんな空中をにらんだまま答えない。

へ真佐夫。最期にもう一度だけ言おう。元の世界に帰るんだ。私はお前を苦しませたくない。頼むから兄の最後の願いを聞き届けてほしい。いいな？

「……兄さん！」

しかしスピーカーはブツツという音を最後に、応答しなくなった。

「兄さんって……あれはエリーの兄貴だったのか？」

「そうよ。——そんなことより、柳瀬さんを起こしてきなさい。急いで逃げないといけないから」

「うん、判った。アイツ一度眠ったら地震だろうが火事だろうが起きないからな」

むんの厳しい声に、揣摩はようやく状況を把握したようだ。ドアを大股で駆け出して行く。

けたたましいブザー音はようやく切られた。しかし、萌黄の心臓はまだ動悸が治まらない。

むんはダブル伊里江に向き直ると、

「脱出する方法はある？」

と訊ねた。

『……あることはあります』

ダブル伊里江は壁際に歩み寄り、机のひとつをふたりで協力して移動させた。その下には、地下に降りる時にくぐった収納扉のようなものがあつた。

『……ここから外へ出られます』

「外って？」

『……海底二十メートルの岩棚に、中古の海底探査船が隠してあります。ただ問題がありました』

「問題？」

『……もともと私たち兄弟の脱出用なので、ふたり乗りなのです』

「……………」

四人が呆然としているところへ、柳瀬を連れた揣摩が戻ってきた。柳瀬は大きなあくびをひとつすると、

「ヘリコプターが屋根の上を、ものすごい音を立てて飛んで行きましたよお。朝から迷惑ですねえ」

「さあこれで全員集合だ。で、どこから逃げる？」

緑の光点が高度を下げ始めた。着陸するつもりらしい。赤い光点も海岸に近づきつつある。

むんは両手をテーブルについて、赤と緑の乱舞をじっと見据えた。その様子はまるで司令官のようだと萌黄は思わずにいらなかった。

「探査船の操縦は、エリーさんやないとアカンわね？」
むんが立体映像から目を逸らさずに訊ねると、

『……………いいえ、自動操縦にも切り換えられます。その場合、洲本か和歌山か、海流の都合の良いほうへと連れていってくれます』

明快な答えだった。しかし探査船に乗れない四人は、ここに残ることになる。

「もうひとつ、エリーさん」

「……………何でしょう？」

「転送装置の充電はまだ終わらへんの？」

リアル伊里江はすかさず装置のところに飛んで行き、充電状態を示すゲージに目をやった。

「……ちょうど完了したばかりです。すぐ使えますよ」

「そう」

むんはわずかに頷いた。そしてゆつくりと萌黄の顔を振り返り、再び伊里江に視線を戻した。

「この部屋にいるリアルはふたり。どちらが元の世界に戻るのか、ふたりで相談して決めなさい」

12

「決めなさいって言われても……」

萌黄はリアル伊里江の表情をうかがった。彼は相方と、懸命に島の周囲のセキュリティチェックに追われていたが、ふと顔を上げると、

「……私は戻りません。それでは何のために自ら進んでこちらに來たのか判らなくなります」

きつぱりと言い切った。

萌黄は、伊里江の向こうに鎮座している転送装置を見た。巨大なリングがトンネルを思わせるように重なり合っている。

（あの中に入れば元の世界に帰れる。お母さんがまだ生きている、平凡な日常に戻ることができる）

彼女は自然に前に進み出た。

萌黄はいま初めて自覚していた。この数日の逃避行で身体も心も疲弊し切っていることを。そんな自分が心の底から渴望しているのは、あの懐かしくも変化の乏しい世界だ。母には職場の愚痴を聞かされ、気まぐれ猫のウィルのご機嫌をとり、お笑い番組に爆笑し、深夜までパソコンに向かつては、ソフトの改良に余念のない日々。良くも悪くも、あの世界は平和で満ち満ちていた。

それがいま、手を伸ばすと届くところにある。

ようやくこの非日常から解放されるのだ――。

萌黄の顔がほころんだのを認めたむんは、親友の肩に手を置き、さとすようにこう告げた。

「決まりやね。萌黄が元の世界に戻りなさい」

ハッと上げた目線が、むんと重なる。

「あっちの世界のわたしによろしゅうね」

むんは萌黄の腕をつかむと、引きずるように転送装置の前に連れて行った。リアル伊里江が通路をわきによける。

「エリーさん、わたし――」

「……兄の言いつけに背いたのは初めてですよ」

彼はぎこちなく微笑んだ。

反対側の通路では、ヴァーチャル伊里江が複雑な機械を操作していた。すぐに転送装置がうなり始め、リング

が重たげに動き出した。いよいよ転送装置が、双方の世界をつなぐ道を開くのだ。

島の立体映像に見とれていた揣摩と柳瀬も近づいてきた。揣摩は萌黄の前に立ち、彼女の手を強く握った。

「萌黄さん、リアルの世界に帰るのかい？ 気をつけてね。どう気をつければいいのか判らないけど」

その手の温かさに、萌黄は揣摩の深い親愛の情を感じた。柳瀬も背中越しにウンウンと頷いている。

リングが水平の位置で静止すると、装置の下から長さ二メートルはある透明シリンダーがせり上がってきた。

『……準備が完了しました。萌黄さん、あの中に入ってください』

ヴァーチャル伊里江がシリンダーを指さした。シリンダーの横に、くぐれるほどの穴が穿^{うが}たれている。

萌黄は、この期に及んでようやく冷静さを取り戻した。（自分だけが元の世界に戻ってもええんやろか。戻ってしもたら、ここににいる人らの安否なんか判れへんようになる。今後のなりゆきも知ることがでけへん——）

そんな萌黄の懊惱^{おのう}を知ってか知らずか、むんは萌黄の背中を押した。

「さあ急いで。ゆっくりされたら、わたしらが逃げ遅れるから」

「でも」

「でもはアカン」むんは萌黄に顔を近づけた。「判ってる？ 敵の狙いはアンタやねんで」

そのとおりだ！ 迷彩服たちの目的は、あくまで「リアル狩り」であり、ヴァーチャルには何の用もないのだ。この研究所がもしも敵の手に落ちたりしたら――。

リアル伊里江が無事に脱出すれば、残された人たちはヴァーチャルばかりである。彼らの運命はどうなるのだろう。リアル^{ごうもん}の逃亡先を知るために、彼らを拷問^{ごうもん}にかけたりしないだろうか？

萌黄の心中で、ますます葛藤が渦を巻いた。

（ああ、もっと時間がほしい！）

萌黄はうつむいたまま、床をにらみつけた。

ポタツ。

床の上に一粒の水滴が落ちた。

萌黄は驚いて親友の顔を見上げた。長いまつげの奥の目があふれんばかりの涙をたたえている。

「むん……」

その時――。

「……飛行物体が高速接近中！」

リアル伊里江が絶叫した。全員が目が彼に注がれる。

「飛行――物体？ 飛行機か!？」と揣摩。

「……のようです。来ます！」

立体映像の上では、高速で移動する青い光点が今まさ

に海岸に達しようとしていた。

「あっ！」

青い光点から小さな点が分離した。ふたつだ。そのうちのひとつが青い円弧を描いて島の中央に吸い込まれていく。ミサイルだ！

ズズーンッ。

地鳴りのような音が部屋全体を揺るがし、天井から土ぼこりが落ちてきた。萌黄は頭を覆った手の間から、おそるおそる天井を見上げた。いかにも頑丈そうな天井はヒビひとつ入っていない。

「……この地下室は冷戦時代に、当時の持ち主がシェルターとしても使えるよう設計したそうです。だからある程度の衝撃には耐えられるでしょう」

「今のはミサイルやね。としたら、発射したのはジェット戦闘機なん？」とむん。

「そういうことになるな。しかし、たかがナマ身の間五人を相手にやることかいな？」と揣摩。

「見て！」

むんが指さしたのは、発射されたもうひとつの光点だった。目標を逸れたミサイルは島の上空を通過し、海岸に迫っていた赤い光点に突っ込み、爆発していたのだ。

同士討ち！、と柳瀬が声を裏返して叫んだ。

ヴァーチャル伊里江がカメラ映像を切り換えた。映像

ウィンドウが、反転してくる機体の姿を捕捉した。
胴体には白い星をあしらったマークが付いていた。

13

「違うよ、あれはアメリカだ」揣摩が手を叩いてはやし立てた。「俺たち、とうとうインターナショナルなお尋ね者になったんだよ、スゴいじゃないか」

「ふざけんというて」

むんがびしりとたしなめたが、揣摩はケタケタと笑い続ける。

誰もが極度の緊張の中にいた。突如あらわれた圧倒的なパワーの前に思考も行動も停止してしまったかのようにだった。

それまで、じわじわと攻めてきていた迷彩服たちが、ミサイルひとつで粉碎された。映像ウィンドウのひとつが、波間に漂う水上スクーターの残骸をズームアップした。立体映像を見ると、赤い光点が一転、島から遠ざかろうとしている。ヘリも姿を消した。同じ敵でもアメリカにとつて迷彩服たちは、互いに協調するどころか、邪魔な存在でしかないのだろう。

「……予想もしなかった敵の出現ですが、解析結果が出ました。米海軍の艦上攻撃機に間違いありません」

リアル伊里江の見つめるディスプレイには、どこかの軍事データベースから引っ張ってきたと思われる一覧表が表示されていた。彼は顔を上げると、

「……北海道消失以後、事の重大さに気づいた海外諸国は、日本だけにまかせておけぬと、独自の調査と行動をとっていたようです。あの攻撃機がその証拠と言えるでしょう」

映像ウィンドウに映る攻撃機は、朝陽を浴びて鈍い光を放ちながら大きく右へと機体を傾けていた。

「おいおい、アイツ、もう一回攻撃しようってんじゃないだろうな？」

揣摩が焦りをつのらせた声を上げる。彼の前で別のパソコンを操作していたヴァーチャル伊里江がゆるゆると挙手した。

『……お知らせしたい情報があります』

「な、何だよ」

全員がヴァーチャル伊里江の唇を見つめた。

『……リアル私が島を出てからの三日間、私はここにおいて、政府や各省庁、各機関、各マスコミのサーバを徹底的にハッキングしました。そこでは平時の数十倍におよぶ情報が行き交っており——』

「時間がないんだ、結論を言えよ！」

ヴァーチャル伊里江は、この数日行動を共にしたリア

ルほど、他人との会話に慣れていない。

『……要するに日本列島は現在、アメリカ海軍によって包囲されつつあります。以前から米国は、リアルに関する情報提供を我が国に強く迫っていましたが、いざとなれば単独で行動を起こすつもりだったのでしょうか。あの攻撃機は、この南方洋上に停泊する空母から発進したに間違いありません』

「……………」

『……さらにアメリカは、我が国に対して最後通牒を突きつけています。数日以内にすべてのリアルを抹殺できない時は、核攻撃も辞さない』

部屋は重苦しい沈黙に包まれた。誰もが現実の展開についていけないでいた。

いみじくも揣摩が言ったとおり、自分たちは、いや自分分は世界的なお尋ね者であり、悪名高いテロリストのよくな国際指名手配という身分に……堕してしまったのだ。萌黄は暗澹たる気持ちになった。

ヴァーチャルな存在として、造られて間もない人類。

彼らに失うものは何もない。鏡像宇宙が生まれる前から、彼らは計画を練っていたのだ。リアルの世界を救うためには、この世界にばらまかれた崩壊の種、すなわちリアルという存在を、どんな犠牲を払っても、抹殺しようと。

しかし仮にもし最終兵器が——核兵器が使用されたと

したらどうなる？　ここにいるむんや揣摩太郎たちの人生はどうなる？

この鏡像世界に未来はないのか？

リアルのコピーでしかないこの世界の住民たちに、生きる値打ちはないというのか？

萌黄はむんの手首を握った。むんの腕は明らかに脈動していた。生命がここにあることを訴えていた。もしも彼女がリアルだったとしても、やはりむんはここにこうしていてくれたはずだ。自分の隣りに。

「……旋回してきます！」

攻撃機は機首を島に向けると、再び攻撃態勢に入った。朝陽をバックに接近する黒い機体は、萌黄に悪魔を連想させた。萌黄は激しい怒りが込み上げてくるのを禁じ得なかった。それはこの世界で母を失った時に感じたものと同じだった。

しかし、むんは萌黄の肩をつかむと、

「萌黄、何グズグズしてんの！　早く転送装置に入りなさい」

しかし萌黄はその手を振りほどいた。

「わたし——帰らへん。ここにおって、戦う！」

萌黄は固い意志をまなざしに込めて親友を見上げた。むんは意表を突かれて言葉を失った。

「……ミサイル第二波、来ます！　みんな伏せ——」

伊里江の言葉が終わらぬうちに、大きな衝撃が部屋を揺るがした。それは第一波の比ではなかった。

14

ズズズーーン。ゴゴゴーッ。

想像を超えた衝撃が、部屋全体をゆりかごのように揺らした。萌黄の身体は紙切れのように宙に浮き、受け身をとる間もなく、リノリウムの床に叩きつけられた。

「あうっ」

後頭部を押さえて顔をしかめる彼女の頬に、硬い砂粒のようなものがパラパラと当たった。目を開くと、天井に黒い亀裂が走っているのが見えた。砂粒は崩れたコンクリートの欠片^{かけら}だったのだ。

「天井が、天井が落ちる！」

思わず叫んだ萌黄の口に、落ちてきた破片が飛び込んだ。

「ウゲッ」

たまらず咳き込んだ彼女に、横から声が飛んできた。

『……こっちに入って！』

声の主は意外にもヴァーチャル伊里江だった。テーブルの下から長い腕を伸ばしている。

彼が直接声をかけてきたのは初めて？ そんな思いが

一瞬頭をよぎったが、「早く！」と急かす言葉で我に返り、両足で床を蹴ると、頭から彼の横に滑り込んだ。

天井からは、後から後から大小の欠片が落ちてくる。

「むんは？」

身体を立て直した萌黄は親友の身を案じた。しかし当の親友は、

「おまたせ！」

と、萌黄に続いて駆け込んできた。リアル伊里江も少し離れたところで手を挙げてみせる。

萌黄はホツとしたが、それも束の間、突然、部屋中の蛍光灯の明かりが消え、視界が暗転した。

（停電——！）

しかし闇に包まれていたのは、わずか二、三秒で、再び明かりが灯った。

『……バックアップ電源に切り替わりました。あまり時間はありませんが』

部屋の揺れは、やがてすぐに治まった。萌黄たちはテーブルの下で身を寄せ合ったまま、辺りの様子をうかがっていたが、

「助けてくれ——」

という揣摩の声に顔を見合わせ、急いでテーブルの下から這い出した。

揣摩は倒れた書棚の下敷きになっていた。さらに天井

から崩れ落ちた瓦礫の一部が書棚の上にのしかかっている。柳瀬が泣きそうな顔で必死にそれらを取り除いていた。

萌黄とむんはすぐに加勢した。大きな瓦礫は協力して動かし、かけ声と共に書棚を持ち上げた。

書物やコンクリートの破片にまみれた揣摩は、それでも無傷だった。萌黄たちはホッと胸をなで下ろし、柳瀬は涙を流さんばかりに喜んだが、

「俺、もうこんなこと耐えられないよ。お願いだから、どこか安全な場所に連れてつてくれよー」

揣摩はそう言うのと、両膝を抱えて激しく嗚咽した。

萌黄は慰めの言葉をかけようとしたが、その腰にむんの腕が巻きついた。エッと思う間もなく、萌黄の足は床を離れた。

「むん、何すんの」

「あんたはな、アホなこと言うてんと、元の世界に戻ればええんよ」

むんが萌黄を下ろしたのは転送装置の前だった。装置は幸い、傷ひとつないようだったが、先ほどまで点滅していたインジケータはすべて消え、コントローラは物言わぬ箱になっている。

「エリーさん、装置がオフになってるけど――」

言いかけて伊里江を振り向いたむんは言葉を切った。

萌黄は怪訝な顔でむんの視線を追った。

そこにはダブル伊里江がうずくまっていた。

「どないしたん！」

むんは萌黄を離し、あわててテーブルのそばに駆け戻った。むんも後を追う。

うずくまってるように見えたのは、片方がもう片方に覆い被さっていたからだ。リアル伊里江はヴァーチャル伊里江の両脇をかかえて、テーブルの下から出て来ようともがいていた。

むんと萌黄は、左右からリアル伊里江に手を貸し、ようやくふたりを明かりの下に引きずり出すことができた。ヴァーチャル伊里江の顔を覗き込んだ途端、萌黄は激しいショックを受けた。目を閉じた彼の端正な顔は紙のように真っ白で、口許からは一筋の血が垂れている。

「……逃げ込む時に、落ちてきたコンクリートの塊が直撃したのです」

リアル伊里江の視線の先に、ボーリングの球ぐらいの塊が転がっていた。こわごわ天井を仰ぐと、まるで蜘蛛の巣のように亀裂が走り、いびつな黒い穴が何力所も空いていた。

萌黄に声をかけた時、彼はすでに手負いの状態だったのだ。この研究室を訪れてから、リアル伊里江の生き写しという奇妙さもあって、つい距離を置いていたが、彼

も自分とメールをやりとりした記憶を持つ人なのだ。もしかすると初めて見るナマの萌黄と話してみたいと思っていたかもしれない。

萌黄は破片の散らばる床に膝をつくと、彼の指を自分の指でそつと持ち上げた。

それを待っていたかのように、ヴァーチャル伊里江のまぶたが開いた。彼はリアル伊里江に支えられた頭を動かさず、目だけで萌黄を見つめた。

15

『……すみません、萌黄さん』

萌黄はヴァーチャル伊里江の言葉に驚いた。

「どうして——謝るの？」

『……転送装置が使えなくなっていました』

むんはすぐ、リアル伊里江に目顔で真偽を訊ねた。彼は目を伏せると、

「……バックアップ電源は、転送装置にはつながっていないのです」

むんの目は大きく見開かれ、相手の横顔を凝視した。

「ホンマなん？」

リアル伊里江は、こっくりと頷く。

「クソッ、なんちゅータイミングの悪い！」

むんは膝を拳で叩いて悪態をついた。

萌黄はしかし、ヴァーチャル伊里江に顔を寄せると、指先を強く握りながら、ささやいた。

「気にせんという。わたしは帰るつもりはないから」

萌黄は、指先を通じて温かいものが伝わってくるのをひしひしと感じていた。

自分の身をこれほど案じてくれる人たちのために、わたしはこの世界で何かをしなければならない。帰ったりしてはいけない。

萌黄は目を閉じて息を吸い込むと、つとめて明るい声で、

「さあ、とりあえず逃げましょうよ」

と、皆を促した。

「そやね、こうなったら他にどうしようもないもんね」
むんも眉を開いて賛同した。しかし座り込んだまま動こうとしない揣摩は無言のままだった。

ピッピッと新たな警告音が流れた。全員が立体映像に目を走らせる。攻撃機は役割を終えたのか姿を消し、代わりに黄色の光点が時間をおいて次々と映像の中に登場した。合計三。

リアル伊里江は手を伸ばしてパソコンのキーを叩いた。開いたウィンドウに、白のヘリコプターの正面画が映し出された。迷彩服たちの乗っていたものよりはるかに凶

体が大きい。

「……おそらく多数の武装兵員が乗り組んでいると思われます。この島に上陸させるつもりでしょう」

萌黄は、お前らの好きにさせるかい！ と心の中で怒鳴った。

「……あと数分で海岸線に達します。これでは地上へ逃げても無駄でしょうね」

「海に潜る船があるんじゃない？」とむん。

「……探査船の定員は二名ですから足りませんよ」

「ほな、イルカになったつもりで泳ぐわ」

「……水深二十メートルですよ。そのうえ海流はひどく速いし、とても泳げるものではありません」

「アンタなあ」ついにむんの堪忍袋が破裂した。「うだうだ言うたらんと、その逃げ道を開きなさい！」

するとリアル伊里江はなぜか目を閉じ、何度も頷いた。むんの言い分こそもつともだと思ったようだ。

彼は、分身を床の上に静かに寝かせると、むんと共に脱出路へと向かった。脱出路の扉のある床にも、棚から落ちた工具類やコンクリート塊が散らばっている。柳瀬も協力して、三人は急ぎ、発掘作業にとりかかった。

『……萌黄さん』

ヴァーチャル伊里江が、自分も立ち上がりとうとする萌黄を呼び止めた。彼女が床に両手について覗き込むと、

『……私を、椅子に、座らせてもらえませんか？』

「えっ、でも動かないほうが」

『……かまいません』

萌黄は言われるままに手を貸し、彼の身体をどうにかパソコンの前に座らせた。

『……ありがとう。私には逃げる前にやっておくことがあるのです』

短くそう言うと、後はパソコンに向かって、驚くようなスピードでキーを叩き始めた。

米軍ヘリの一機はすでに島の上空でホバリングしている。兵員が続々と降下しているようだ。もはや一刻の猶予もならない。

萌黄は脱出路とは反対の、研究室の入口へと駆け出した。自分たちの寝ていた部屋にリュックを置いたままなことに気づいたのだ。

廊下にも亀裂は走っていたが、こちらは軽微だった。

萌黄は寝室に飛び込むと、自分のリュックを背負い、むんのリュックを手にとって、再び廊下に出た。

《……………》

（えっ？）

彼女の耳が聞き慣れない声を捉えたのだ。

《……………》

（会話みたいや。誰が話してるんやろう？）

萌黄は心を鎮めて耳に神経を集中させた。声はだんだん明瞭さを増し、やりとりしている言葉が英語らしいことが判った。内容はまったく理解できないが、島に降り立った米兵であることは確からしい。

萌黄は急ぎ、研究室に戻った。

「大変や！ 敵がもうそこまで来てる。話し声も聞こえるし」

「……そんなバカな」

怪訝な顔をしたのはリアル伊里江だった。彼はやっとのことで開いた脱出扉を離れ、萌黄のそばに飛んできた。

「……この地下室は入口を閉め切ると、一切の物音を遮断する設計になっているのです。聞こえるわけが――」

そこまで言うと、リアル伊里江は「あつ」と大きな口を開けた。ヴァーチャル伊里江も同時に頷き、つぶやいた。

『……リアル耳ですね』

16

「リアル耳？」

萌黄がおうむ返しに訊ねると、ダブル伊里江は揃って首を縦に振った。

「……今朝この部屋に入ってきた時、萌黄さんはこう言

いましたよね、話し声が聞こえた、と」

「うん」

「……でも、そんなことはありません。なぜなら地下室はどれも扉を閉じてしまうと、決して外に音が漏れない仕組みになっているんですよ」

「それじゃ、わたしの聞いたのは空耳^{そらみみ}？」

「……違います。じっさい私たちはこの部屋で話をしていたし、今も、ほらすぐこの上まで米兵たちはやってきています」

リアル伊里江の指さす立体映像では、まさに研究所の真上にある建物のそばまで、米兵が接近しつつあることを示していた。

「……上手く説明できませんが、おそらく鏡像世界にいるリアルは、五感の能力が飛躍的に高まるのかもしれない」

「五感？ 視覚とか聴覚とか？」

「……ええ」

「でも、今は全然聞こえへんけど」

「……想像ですが、耳なら耳に集中することで、能力が研ぎ澄まされるのではないかと——」

「コラッ！」 むんが目を吊り上げてふたりの間に割って入った。「いい加減にしいよアンタら。敵がそこまで来とんのに、悠長に議論なんかしとったらアカン。さあ、

逃げるで！」

「待って」

萌黄はむんを引き止めると、ヴァーチャル伊里江の腕をとった。

「行こう。わたしに負ぶさって」

ヴァーチャル伊里江は一瞬驚いた表情をしたが、すぐおだやかな笑みを浮かべ、

『……私にはすべきことがあります。私はここに残ります』

「アカンよ、すぐそこまで敵が来てるんやで！」

『……判ってます。でも、いいんです』

二の句の継げない萌黄の肩に、リアル伊里江が手を乗せた。

「……この研究室のデータを私のリュック・パソコンに転送する作業が残っているのです。とくに彼がこの数日、調べ上げてくれた鏡像世界に関する最新データは、今後我々の行動に役立つってくれるでしょうからね。そして転送後は、研究室にあるすべてのデータを消去する必要があります。ただ消去するだけでなく、ハード的に破壊する必要がありますのです」

言葉は淡々としているが、しゃべる彼の顔は苦痛に歪んでいた。

『……それに』ヴァーチャル伊里江が後を継いだ。『私

はもう長くはもちません』

そう言つてTシャツを上げると、脇腹が灰色に変色しており、既に皮膚の質感を失っていた。

誰も返す言葉がなかった。

ヴァーチャル伊里江は屈託ない笑顔を浮かべているが、額や首筋には脂汗がにじみ出ている。既にかなりのダメージを受けている証拠だ。

それだけに彼の笑みは、決意の固さをあらわしていた。リアル伊里江もそれを認めている。

むんは黙つて手を差し出した。ヴァーチャル伊里江は無言でその手を握った。萌黄も握手した。

『……リアルの私をよろしくお願いします』

ヴァーチャル伊里江は椅子にかけたまま、頭を下げる。するとそれが合図だったかのように、頭上でドドドドツというけたたましい音が響き始めた。

『……掘削機械でしょう。地下の存在に気づいたのですね』

「さあ、今度こそ行くで！」

むんの掛け声とともに、皆は脱出口へと向かった。

ぽつかりと開いた脱出口のそばでは揣摩と柳瀬が待っていた。揣摩はやきもきする柳瀬をよそに、壁にもたれたまま、うつろな目をあらぬ方向に漂わせていた。

「……私から行きますね」

リアル伊里江は穴の縁に両手をつき、体操の吊り輪の要領で身体を宙に浮かせた。「では」と言うと手を離し、彼の身体はスツと穴の中に吸い込まれていった。覗き込むと、姿はもう見えない。穴は斜め前方に緩い傾斜で下っており、終点まで滑り台が連れて行ってくれるという寸法だ。

「揣摩さん」

むんが次の順番をと呼びかけたが当人の答えはなかった。相変わらず壁の前でじっと動かず、顔を両膝の間にうずめている。

柳瀬はしかし百戦錬磨のマネージャーだった。どっこらせと揣摩を肩に担ぎ上げると、のっしのっしと脱出口に近づき、まるで米俵でも運ぶようなぞんざいさで穴の中に放り込んだ。時には貴重品扱いを忘れることも秘訣のうちだと言わんばかりに。

「お先ね」

柳瀬の身体も脱出口の中に消えた。

「むんも先に行つてな」

萌黄が言うと、むんは躊躇の様子を見せたが、軽く頷き、するりと暗い穴の中に飛び込んだ。

萌黄は最後にヴァーチアル伊里江を振り返った。彼も萌黄の視線に気づき、両手の指はキーを叩き続けながら、彼女のほうを一瞥した。

『……さようなら』

「さようなら」

萌黄は突っ張っていた両手を離した。一瞬にして光は消え、彼女の身体はチューブの中を滑り降りて行つた。

脱出路の傾斜は出口が近づくにつれてゆるやかになり、終点でスピードはゼロになった。

待ちかねていたむんが手を差し伸べた。萌黄は起き上がるのと周囲を見回した。

自然の手による洞窟。それが第一印象だった。ところどころ人の手で削ぎ落とされた痕があるが、おおむね自然のままのようだ。無骨な小型クレーンや滑車をたらしめたウインチなど、重機類が目につく。広さは二十畳ほどだろうか。低い天井にはカンテラが吊るされ、ゆらゆらと影を揺らめかせていた。

海底探査船はすぐ目の前にあった。思ったより巨大だ。白くのとっぺりしたボディは子クジラを連想させる。

探査船の前方には海水が寄せていた。洞窟は海水の中へと続いている。

萌黄とむんは伊里江のそばに駆け寄った。

「おまたせ。すぐ逃げられそう？」

しかし伊里江は首を振り、洞窟の奥を指さした。

「……ダメです。あの地震のせいでしょう。外海^{そとうみ}への出

口が塞がっています」

17

萌黄は身を乗り出して水中を透かし見た。海水は透明度が高く、カンテラの強い光が水底にまで達していた。

「……あそこです。崩れた岩が見えるでしょう？」

言われてみると、確かに黒々とした岩塊が三つ四つ積み重なっている。

「……探査船で押して岩をどかさうにも、探査船自体を降ろせるだけの空間がないのです」

なるほど転がり落ちた岩塊がひとつ、手前に転がっている。相撲取りが三人束になったぐらいの大きさで、とても人力で動かせそうにない。

「ひひひ。ざまあねえや」

奇妙な笑い声を上げたのは揣摩だった。隅のほうで壁にもたれ、へらへらと狂的な笑みを浮かべている。小刻みに震える親指と人差し指のあいだからは、煙草の煙がゆらゆらとたなびいていた。

「タロちゃん、やめなさい」

柳瀬が諫めても、揣摩は笑うのを止めなかった。

「エリーさんよう。もういいじゃねえか、ここらであきらめようぜ。ホールドアップして投降すりゃ、まさか米

軍も撃つたりはしないんじゃないのお？」

伊里江は揣摩を無視すると、水辺にしゃがみ込んだ。萌黄も並んで屈み、彼の横顔を見つめたが、何を考えているのか想像がつかなかった。それでもあきらめてはいないらしいことは読み取れた。

彼の視線はずっと水中の岩塊に注がれている。とくに一番手前で探查船の邪魔をしてるヤツだ。萌黄も真似をして視線を岩塊に向けた。ひよつとすると、リアル目ヂカラで岩を動かすことができるんじゃないかと思ったが、岩塊はびくともしなかった。

伊里江はふと立ち上がると、リュック型パソコン――裏返すとパソコンになる――を放り出し、そのまま水中に足を踏み入れた。萌黄はアッと叫んで彼の服に手を伸ばしたが、伊里江の足は速く、彼女の手は空をつかんだ。

「ど、どうするつもりなん!？」

むんが訊くと、伊里江は意外な答えを返した。

「……押して動かします」

「動かす――って、あんなに大きな岩を？」

「……はい」

「よしっ、手伝いますわ！」

柳瀬は威勢良く上着を脱ぎ、ネクタイをゆるめた。しかしそんな柳瀬を伊里江はあわてて制止した。

「……危険ですから私にまかせてください。じつは私に考えがあるので」

そう言うと、彼は頭の先まで水の中に没してしまった。萌黄は固唾をのんで見守った。

伊里江は両手を掻きながら器用に水の中を進んでいく。そして岩塊にたどり着くと、両足を底に降ろし、踏ん張るような姿勢をとった。

「本気なの？ あの人」

柳瀬もむんも不安げに見守っている。

その時、誰の目にも岩塊が動いたように映った。

「やだ、ホント？ すごい」

「ホンマや、動いてんで！」

東京弁と関西弁の混ざった歓声が交互にあがった。

岩塊はまるで発泡スチロールで作られた舞台セットのように軽々と浮いた。伊里江は両手を添えたまま押し続ける。

とうとう岩塊は、出口を塞いでいる他の岩塊の上に載せられた。

「そーいやエリーさん、ガス爆発の時に言うてたね。意識を集中させると物を操ることができるって——」

むんがつぶやいた。

「やるねえ、あの人。それに息がよく続くこと」と柳瀬。「かれこれ三分以上は潜ってるんとかやう？」

これで探査船を水中に下ろすことができる。見守っていた一同がホッと安堵の息を吐いた時だった。ドンッ。

鈍い破裂音がしたかと思うと、激しい水柱が噴き上がり、辺り一面に水しぶきが飛散した。

「エライこっちゃ、岩が爆発した！」

「エリーさんは!？」

全員の顔に緊張が走った。

しかし心配は杞憂だった。泡立つ水の中からぽっかりと顔を出した伊里江は、手を振りながらこちらに戻ってくる。

萌黄たちは急ぎ駆け寄り、伊里江を引き上げた。

伊里江は地面に濡れた身体を横たえると、

「……脅かしてしまっただでしょうか。最初は邪魔にならないところへ移動させるだけのつもりでしたが、いちかばちかで丸ごと粉碎作戦を試みました。結果はどうでしょう？」

「結果？」

伊里江は息が半身を起こすと、穏やかになりつつある水面を指さした。

「あっ」「おーっ!」「すげーっ!」

柳瀬も萌黄もむんも、口々に驚きと喜びを表した。

出口を塞いでいた岩は影も形もなく、深い藍色の外海

が萌黄たちを手招きするように微笑みかけているではないか！

「……探査船をクレーンで吊り上げ、水の上に浮かべます。みなさんも手伝ってください」

伊里江は立ち上がり、濡れた髪もそのままにクレーン操作盤に飛びつくと、電源を入れ、レバーをぐいと引いた。

モーターが威勢良く動き始め、探査船の上部に繋がれたチェーンが電動ウインチによって徐々に巻き取られていく。

長時間の潜水。見慣れない機械の操作。萌黄は伊里江に逞しさを感じずにはいられなかった。彼女がそう言うのと、伊里江は少し照れたようにはにかみ、

「……泳ぎの上手いのは、この島で育ったおかげですよ。パソコンに向かってる時以外は、林の中を駆け巡ったり、海で泳いだりしていたわけですから」

「うーん、負けたなあ」

萌黄は脱帽した。そこへむんが寄ってきた。

「ねえ、探査船には誰を乗せよう？」

「……誰がいいと思いますか？」

「そやね。わたしはあのふたりかなと思うけど」

むんは肩越しに揣摩たちをうかがった。

「……同意見です」

ピンと張ったチェーンがキリキリと音を立て、探査船の巨体を持ち上げ始めた。

次にクレーンはゆっくりと向きを変えた。探査船はしずしずと海水の上に移動していく。

伊里江のハンドルさばきは手慣れたもので、頃合い良くウインチを逆回転させると、探査船は静かに降下し、見事、着水を完了した

伊里江は操作盤を離れると、萌黄を呼んだ。

「……チェーンの先にあるフックを探査船から外すのを手伝ってください」

萌黄はOKと答え、伊里江に続いて探査船に飛び移った。

丸くツルツルとしたボディは、それだけで上るのに苦労した。

作業は決して簡単ではなかった。フックはかなりの重量があり、取り外すには男性並みの腕力が必要だった。

萌黄は自分のひ弱さを痛感したが、それでも懸命に伊里江の作業をサポートした。

ようやくひとつを外した萌黄は、息も絶え絶えになりながら、

「気をつけやんと、指をはさんだりしそうやね」

「……だからヴァーチャルにはまかせられないんです」

萌黄は納得した。

揣摩の様子を見に行っていたむんが戻ってきた。

「柳瀬さんは大丈夫やて言うてはるわ。鎮静剤を飲ませるって」

その揣摩が柳瀬の肩を借りて腰を上げようとしていた。足許がおぼつかない。とても大丈夫には見えない。

「エリーさん」むんが続ける。「これに乗らへん人は、小判ザメにでもならせるつもり？」

「……おっしゃるとおりです」

「小判ザメ？ あ、そうか」

萌黄はむんの言い回しを理解した。

彼女もうすうす気づいてはいた。乗り込めないなら、かじり付いていくしかない。でも――。

「でも、海に慣れてるエリーさんはともかく、わたしや萌黄は息が続かんかもしれへん。付近には敵がおるやろうから、すぐに浮上というわけにもいかへんでしょ？」

そう。しかも――。

「しかも、いきなり水深二十メートルの世界に飛び込むんやから、わたしらに耐えられるかなあ」

そのとおり。とはいえ――。

「とはいえ、他に逃げ道がないんやから、当たって砕け

ろやね。ホンマに砕けてもうたら、シャレにならへんけど」

ホンマに――。

ところが伊里江の返事は、また明快だった。

「……ひとつ、とっておきの作戦を考えてあります」

それだけ言うと、萌黄に再度ウインチを巻き上げるよう指示し、探査船のハッチの中に消えた。

煙に巻かれたふたりは、不安と期待の入り混じった視線を交わした。

「また、リアルパワー？」

むんは肩をすくめながら柳瀬のところに戻った。萌黄も操作盤の前に行き、教えられたレバーを引いた。

フックが巻き取られ、クレーンが探査船から離れていく。代わりに柳瀬とむんに両側を抱えられた揣摩が、足を引きずるようにして探査船に近づいた。

まさにその時――。

コンコンッ。

どこか遠くで鍋でも叩いているような、そんなトボけた音を、萌黄の耳は聞き咎めた。

（なんやろ？）

コンコンコンッ。

今度はさつきよりはつきり聞こえる。

萌黄は目を閉じて、耳に神経を集中させた。

（こんな時こそ、リアル耳を使わんと）

両方の耳たぶに手のひらをかざしてみる。

すると突然、萌黄の両耳は身体を離脱し、すさまじい勢いで空中に飛び上がった。

耳はカーブを描きながら探査船に近づく。

『ごめんね迷惑かけて。タロちゃんは時々こうなっちゃう人なのよ。もともと線の細い性分だから頑張り過ぎると――』

耳は急降下し、探査船に潜り込む。

『……これで自動操縦モードになった、と』

さらに耳は分厚い外壁をすり抜け、空中に躍り出ると、せま苦しいパイプの中をぐんぐん上昇し始めた。

コンコンッ。音がさつきより大きく聞こえる。どうやら音の源はこの上らしい。萌黄の耳は隔壁を飛び越え、研究室へと舞い戻った。

研究室は、自分たちがいた時とは明らかに様子が違っていた。

室内には英語が渦巻いている。米兵たちが部屋を歩き回っている。彼らは壁や床を叩いていた。耳にした音はそれだったのだ。ターゲットの萌黄が直前までそこにいたと断定し、逃走経路を探しているのだろう。

『……もう少しだ』

（ヴァーチャルのエリーさんの声！）

呼びかけてみたが、もちろん彼に聞こえるはずもなく、彼のか細い声は、すぐ英語のざわめきにかき消された。

萌黄が一步前に出ようとした時、部屋の隅で喚声が上がった。米兵たちが大声で呼び合っている。

（脱出口に気づかれた！）

萌黄は直感した。

目を開くと、耳と意識はちゃんと自分の身体に戻っていた。そのことを確認した萌黄は、探査船に向かうべく、すぐに操作盤を離れた。

（急げ急げ、急いで脱出や！）

その時、脱出口から白い煙を噴き出しながら転び落ちてきた物体があった。前を横切ろうとしていた彼女は、つい足を止めてしまい、運悪く、その煙を吸い込んでしまった。

19

萌黄はたちまち喉に激しい痛みを感じ、目からはぽろぽろと涙があふれ出た。

（催涙弾——！）

気づいた時はすでに遅く、彼女は取り囲んだ煙の虜とりこになっっていた。

（全然前が見えへん）

煙に巻かれたばかりでなく、痛みに目を開けることができない。早く逃げなければと焦りばかりが先行し、こみ上げてくる息苦しさもあつて、足はもつれるばかりだ。さらに追い討ちをかけるように二個、三個と催涙弾が脱出口を滑り落ちてきた。米軍は自分たちがここにいることを察知したのか？

白煙が激しさを増していく。

とうとう彼女は動けなくなつて、地面に手をついた。

（もうアカン）

あきらめかけたその時、文字どおり一陣の風が辺りの煙を薙ぎ払った。これも敵側の攻撃のひとつと勘違いした萌黄は、顔を両手で覆つて地面に這いつくばったが、

「……萌黄さん！」

すぐそばで伊里江の声がした。声のする方向に救いを求めて手を伸ばし、その手を伊里江がしっかりつかんだ。

「さあ立ちなさい！」

むんが背中にもわつて萌黄の腰を引き上げようとする。萌黄は激しく咳き込みながら、ふたりに支えられて懸命に足を前に動かした。

「今さっきの風は、ゲホゲホ、もしかして……」

萌黄が訊ねると、

「……私がやりました」

伊里江が気負いもなく答えた。

意識を集中させることで対象物を操る能力。ガスを操った経験から、今度は空気を操って風を起こしたのであろうことは容易に想像がつく。

しかしそんな奇跡的な能力を、状況に応じて的確に使いこなす伊里江の頭の良さに、萌黄は舌を巻かずにはいられなかった。

「……萌黄さんにもできますよ」

「そんな、わたしなんか——」

むんが萌黄の背中を叩いて、注意を促した。

「さあ、把手につかまって」

言われるままに手を差し出すと、ざらついた金属の手触りが指に触れた。萌黄に続いて伊里江とむんも探査船の別の把手に両腕を絡めた。

「……スタートボタンを押してください！」

伊里江は探査船の外殻に取り付けられた外部マイクに叫んだ。すると呼応するようにスクリュウの回転する振動が伝わってきた。

いよいよ海に潜るのだ。萌黄はいやが上にも緊張した。大量に涙を流したせいで、目の痛みが治まりつつあった。薄目を開くと、隣りで把手につかまる伊里江の姿があった。左手の人差し指を目の前に立て、怒ったような表情で指先を見つめている。何をしているのか。萌黄は声をかけるのがためらわれた。

「邪魔せんようにね！」

むんが耳許で叫んだ。探査船の推進音が大きくなったため、大声じゃないと聞こえないのだ。

探査船は急速潜航しつつあった。小さな窓越しに、なかで親指を立てる柳瀬の顔が見えた。その横には椅子に固定された揣摩の姿も。

萌黄の靴を海水が洗った。覚悟はしていても、これから深い海のなかへ出て行くのかと思うと、萌黄は鳥肌の立つのを覚えた。

振り返れば、背後ではさらに白煙が広がりつつある。

（進むも退くも地獄……）

萌黄はぎゅつと目を閉じた。すでに海水は膝上に達している。水は想像以上に冷たい。

「……わたしを見てください」

伊里江が言った。彼は指先を下に向けている。伊里江の下半身に目を移した萌黄は、ぎよつとなった。

彼はまったく濡れていなかったのだ。

「なんで？」

目を白黒させる萌黄に伊里江は笑って答えた。

「……空気の皮膜を作り、身体を覆いました。シャボン玉のなかに潜り込んでると考えてください」

それはまるで特撮映画のような光景だった。萌黄はしばし目を奪われた。なるほどこれも『空気を操る』こと

で可能なのだ。彼女はすぐに納得した。

「……昨夜は眠らずにいろいろ実験していたのですが、それが功を奏しました。さあ、萌黄さんも試みてください。あなたにもできるはずですから」

「どうやればいいの？」

「……一番いいのは、私がやったように指を一本立てて、そこに意識を集中させる方法です。そして、ウツ——」

突然、伊里江は身体をねじると、握っていた把手にもたれかかった。一瞬にしてシャボン玉ははじけ飛び、水面が波立った。

「どないしたん、あつ！」

萌黄もむんも驚いた。

腰まで水に浸かった伊里江の背中に、ダーツの矢のようなもの突き立っていた。

20

倒れかかった伊里江の肩越しに、異形のマスクをかぶった人間の姿が見えた。その手に銃らしきものを構えている。

萌黄は自分の顔が恐怖に歪むのが判った。

探査船はいまだ進水の途中である。すでにシャボン玉は消え、海水は腰上に達している。攻撃に対して、完全

に無防備な状態だ。

異形の男は間合いを詰めるべく、こちらに向かって進撃を開始した。しかし白煙で見えない床の何かにつまずいたらしく、オウと叫んで激しく転けた。洋画のようにカッコよくはいかないものだ。

いや、それどころではない。

伊里江は腕をまわして、背中に刺さった矢をつかむと、「……派手な空爆を繰り返しておきながら、いまさら麻醉銃とは——」

気合いとともに一気に引き抜いた。すると刺さっていたTシャツの破れ目から大量の血が噴き出し、萌黄とむんを驚かせた。

伊里江は傷口に当てた手を広げてみせた。意外にも赤味は少ない。

「……麻醉薬を吐き出したのです。少しは体内に残ったようですが……ダメですね、リアルも不意打ちを食らうと怪我をしてしまうらしい。萌黄さん、あとはまかせました」

（えー……）

すでに水面は胸元に迫っている。アクアリングもなしにこのまま海に出て行ったら、ほとんど息はもつまい。

むんが早口にまくしたてた。

「こうなったら海に出るまで探査船にくっついというて、

外へ出たらすぐ手を離して浮上するんよ。島の海岸べりやったら、どこなと隠れるところはあるはず」

「……いけません！」苦しい息で伊里江がむんを見据えた。「……一刻も早く、島を離れる必要があります。さもないと——」

バシュツ、バシュツ、と立て続けに破裂音が起こり、伊里江の身体が二度はずんだ。

「エリーさん！」

「……大丈夫です。警戒していれば問題ありません」

水面をダーツの矢が流れていった。伊里江はふたりの盾となって矢を跳ね返したのだ。しかめっ面を見せた伊里江の頬に内出血のような痣あざができていた。

「……さあ萌黄さん、最後のチャンスです。気持ちを集中して、空気の球を作るんです！」

萌黄は追いつめられた。

わらわらと迫り来る米兵たち。

彼女の首筋にまで上昇した海水面。

探査船を飲み込まんと、大きな口を開いて待ち構える外海。

萌黄は右手の人差し指を目の高さに持ち上げた。自信はない。ないけれどやるしかない。集中するんや！

彼女は頭の中に空気の塊を思い描いた。

形は三人を包み込めるよう、高さ二メートルの縦に長

い楕円体がいい。水圧つてどのくらい？ 耐えられるように玉子のカラみたいに硬くする？ 凍らせるとか……そこまでは無理か。それなら滝のように空気を流して、エアーカーテンに仕立て上げるとか……。

ふと気づくと、彼女のまわりから水が引いていた。

シャボン玉は萌黄の人差し指を中心に、徐々に大きくなっていく。

（うわーっ、できてもたあー）

萌黄は、歓喜と戸惑いの入り乱れた気分で、海水と空気の境目を驚異の目で観察した。

すでにむんと伊里江の身体は、萌黄が頭に描いたとおり、すっぽりとシャボン玉のなかに収まっている。さらに驚いたことには、シャボンの界面が小刻みに震えている。

カンテラの光を受けて、シャボンに影を落とす米兵たちが水際に並び、こちらを眺めている。マスクを外した顔は一樣に驚愕の表情を浮かべている。

ひとりが銃を構え、銃弾を数発ばかり発射したが、すべて振動するシャボンの前に、あらぬ方向へとはじき飛ばされた。

ゴボツ。探査船はついに水面下に没した。尾部に三人を包む空気の球をくつつけた姿は、子クジラというよりも、卵を背負ったカエルのようなだった。

探査船は短いトンネルをくぐり、やがて外海に出ると速力を上げた。

三人を取り囲むシャボン玉は、見事なまでにその効力を示してみせた。萌黄とむんは周囲に広がる光景に感動し、同時に畏怖の念を抱いた。

頭上高くにきらめく光の束はもちろん太陽で、足下に目を転じると、底の見えない海が延々と続いている。

先ほどまで見えていた島の海底部も紺碧の海流の彼方へと去った。時折わきをかすめる魚影以外に、萌黄たちが目にとめるものは何もなかった。

「スゴいねー。こんな体験、もう一生ないやろなあ」
むんがため息をつくとき、

「宇宙飛行士にでもなった気がするね」

と萌黄も、全天球型の水族館に圧倒されていた。

とはいえ、萌黄は隣りの伊里江の容態が気がかりだった。口では大丈夫と言っても、顔は恐ろしいほど蒼白で、把手につかまっているのもやつとという感じだ。

萌黄は片手で伊里江のベルトをつかんでいた。同時に空気のシャボン玉を維持しなければならず、気持ちが続かないよう、集中力を持続させるのに骨が折れた。

「……空気が、汚れてきましたね」

伊里江が口を開いた。

「まだまだ」萌黄は笑ってみせた。

その時、伊里江のリュックがピーツと信号音を鳴らした。

「……来た！」彼は叫ぶと「ふたりとも、しっかり船につかまっけていてください！」

21

これまでの経験で「何が？」と能天気に関り返すのが愚かなことを知っている。ふたりは言われたとおり、即座に手足を把手にからめて不測の事態に備えた。

ドドーンッ。

その音は恐るべき速さで彼女らの横を駆け抜け、続いて巨大な波動が探査船に襲いかかった。

声を出す暇もなかった。

探査船は台風に翻弄される木の葉のようになると舞い、制御を失ったまま海流に押し流されていった。

空気の球は激しい変形を伴いながらも、どうにか探査船の船尾を離れなかった。萌黄は振り落とされないよう、必死にかじりについていた。

続いてやってきたのは石つぶての雨だった。ほとんどは小石程度だったが、なかにはボーリングのボールほどのものもあり、次々に着水すると探査船の鋼板を叩き、萌黄たちの身体をかすめ、彼女らの肝を冷やした。

しかしこれらの異変は始まった時と同様、突然終わった。

数分後、探査船は海面に浮上した。シャボン玉のなかの酸素が限界に近かったので、心地よい潮風を浴びた時、萌黄は雄叫びを上げずにはいられなかった。

「ふわーっ、生き返るー」

じっさい彼女はくたくたに疲れていた。

「あれ見て！ 島が」

むんが悲鳴に萌黄が振り向くと、もうかなりの距離が離れていたにもかかわらず、島の方向はすぐに判った。

なぜなら島は噴火のような黒煙をたなびかせていたからだった。

「……研究所に仕掛けておいた爆弾です。もし私たち兄弟が追っ手に発見された時、重要なデータが敵の手に渡ることのないよう準備しておいた自爆装置です」

伊里江は息も絶え絶えに語る。

「でも、あそこにはエリーさんの――」

「……ええ、彼がスイッチを押したのです。どうせ彼は瀕死の重傷を負っていたので助かる見込みはありませんでした。彼とは、すべてのデータを転送した後で爆破するよう、私と約束していたのです」

「そんなアホな」

「……おかげで私たちを目撃した米兵たちは吹っ飛んだ

でしようし、上空を飛んでる連中もしばらくは島から動けないはずです。さあ、今のうちにできるだけ遠くへ逃げましょう」

また爆発音が轟いた。海沿いの崖が崩れ落ち、島の輪郭がみるみる変形していく。島全体に広がった火の手は、どん欲な怪物のように、残った木々を次々と飲み込んでいった。

「……逆の立場で、私がヴァーチャルだったとしても、同じ決断をしました。何より彼は私自身であり、私は彼自身だったのですからね」

萌黄には返す言葉もない。

「……兄は私が彼の意見を受け入れず、元の世界に戻らなかった場合、私を見殺しにするつもりだったのです。現に私の分身は、兄が迷彩服たちにリークした情報を嗅ぎ付けた米軍の手によって殺されました。いわば私は兄に殺されたも同然。これからの戦いは、私による私のための弔い合戦です。そのためには、分身が収集し整理してくれたデータが強い武器になってくれるでしょう」

彼のリュックパソコンは海水に濡れないよう、萌黄たちのリュックといっしょに探査船のなかにある。

三人は島に別れの一瞥を送った。

探査船は自動操縦を切り、浮上モードで進み続けた。米軍は追ってこなかった。味方の救助活動か、データ

収集にでも奔走しているのだろうか。

探査船は太陽に向かって快走を続ける。すぐ左に大きな島がある。伊里江によれば「地ノ島」だという。

島を横目に通過すると、待望の陸地は間近だった。

この辺りは和歌山市北部に位置し、海岸近くまで山がせり出している。伊里江は船首を南に向けさせた。萌黄の頭の中の地図とは左右逆なので、彼女は地理を理解するのに苦労した。

城ヶ崎の突端を迂回すると、船は加太湾へと静かに進入していく。

萌黄は決意も新たに、近づく浜辺を見つめていた。

（とにかく伊里江真佐吉の野望を打ち砕くしかない。不安ばっかりやけど、怖がっててもしょうがない。逃亡の旅はここまでや）

〈第九章につづく〉